

Manifesto de Sennaciistoj

無国民主義者宣言

Eŭgeno Lanti, 1931

1. 国際主義 Internaciismo

83年前に出た有名な宣言 [共産党宣言のこと] は、万国の労働者に団結せよと呼びかけた。それを目的として、すでにさまざまな国際組織（インターナショナル）が設立されている。その指導者たちは、手紙にせよ大会での会合にせよ、そこそこ頻繁に連絡を取り合っているが、たいていの場合、それは翻訳と通訳を通じたものである。一般に、民衆はいまだ国民・民族の枠に完全に分断されたまま、おぞましい戦場での出会いを除いて、互いに接触することがない。

その国民・民族の枠の中で、学校教育や刊行物など、国家が手にしうるあらゆる手段によって、数世代のちには国民・民族が真のひとつの精神的種族となるように、人間の精神が作り上げられていれる。

実際、専門家の言うところによれば、すでに何世紀も前からいわゆる文明国においては、生物学的意味における純粋な種族というものは、もはや存在しないという。たとえば、フレデリック・ルフェーブルの研究によれば、フランス人の一部に見られるの古来の短頭系の住民は、モンゴル系人種の血を引くらしい。ジャン・ブリュネスは、今日のベッサラビア、ウクライナ、ポーランドのユダヤ人は、その大部分が、1千年前にハザール汗国の政治的軍事的影響下にユダヤ教に改宗したスラブ人やタタール人だということを証明した。さらには、そのハザール人自身がユダヤ化したチュルク人なのである。それが、今日、クラコフやワルシャワのユダヤ人のほうがエルサレムのユダヤ人よりユダヤ人らしいという奇妙な結果をもたらした。

なるほど、哲学者や心理学者なら、「歴史的種族」「諸国民の魂」について語ることもありえるだろう。だがその「種族」やら「魂」は、ある意味において、人間が作り上げた人工物である。それらには、本質的に不変で変更不可能なところは何もない。それは、あたかも歴史が捏造したものである。にもかかわらず、自称革命家の中にさえ、<国民・民族>がまったく自然で神聖であり保持すべきも

のであると考える人たちがいる。そのような観点は、＜本質において＞反動的である。

そういう人の中でも高名な人のひとりがジャン・ジョレス⁽¹⁾である。ジョレスの『新しい軍隊』には、愛国心、あるいはナショナリズム、そして国際主義への華々しい支持と擁護が見られる。マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』の中の有名な語句、「プロレタリアに祖国はない」を注釈して、ジョレスは、その正しい意味を説明するために、大量の論議を尽くして『宣言』の著者たちが民族の独立と自決権の支持者でもあったことを示そうとしている。

マルクスとエンゲルスは、「プロレタリアに祖国はない」と述べることによって、事実を認識しただけである。プロレタリアは祖国のなにがしかの部分を取分として所有してはいるのではないから、祖国をもたないと論じることができるのである。しかし、『宣言』の著者たちが次のように付け加えたのを見逃してはならない。

「プロレタリアートは、まず政治支配権を獲得し、国民・民族の支配階級として自らが国民・民族の構成者とならねばならないから、プロレタリアートは、ブルジョワ的意味とはまったく違う意味で、やはり国民的民族的存在である」
さらに後には、

「個人に対する他者の搾取がなくなるにつれて、民族に対する他民族の搾取もなくなる」「民族内部における階級どうしの反目がなくなれば、民族どうしの敵対もなくなる」

以上の発言の中に民族の存在に対する非難が見いだされないという点は、ジョレスのいうとおりである。このように、マルクスとエンゲルスには国民・民族の解消を促進しようという見解はなく、彼らは純粹に国際主義的な見解に立っている。要するに、彼らは無国民主義者ではない。

ジョレスはさらに続けて、資本主義支配制度下にあってもプロレタリアには祖国があると論じる。それは、ある意味において正しい。国民・民族の枠の中では、ブルジョワとプロレタリアは同じ国家的手段によって同じように作り上げられる。同じ言語を話し、その言語という強力なきずなによって、人々は、自分たちが同じ大家族の一員である、と漠然とを感じるようになる。このように国民・民族の枠

に封じ込められた人間は、魂と性格の類似性を帯びるようになる。人々は、とりわけ戦争のような歴史的時間内にいるとき、互いが何らかの同じ血を引く近親者だと感じるようになる。こうして、1914年の戦争勃発時に見られたような、異常な病的愛国心を生み出すことになるのである。階級闘争はどこかへ吹き消され、初めの何か月かのあいだ、階級間の「聖なる統一」がなる。愛国心の熱狂は他のあらゆる感情を圧倒し、理性を弱体化させ麻痺させる。

国民・民族は現実であり事実である。もちろん、事実を認識することは、それを是認することを意味しない。宗教も伝染病も事実であるが、その存在がそれで是認されるものではない。ジョレス、バーベル、レーニン⁽²⁾、その他、労働者運動のあまり知られない多くの指導者たちが、国民・民族が自然な存在であり擁護すべきものだと思なしていることも、また事実である。

ベーコンの、「少しの科学は神への信仰を弱くするが、大量の科学はそれを強くする」という言葉を借りれば、ジョレスの結論は次のように言うことができる：

「少しの国際主義は愛国心を弱くするが、大量の国際主義はそれを強くする；少しの愛国心は国際主義を弱くするが、大量の愛国心はそれを強くする」。

これはつまり、国際主義は世界の無国民化を促進しない、ということを明言したものである。

また、さまざまな国際組織（インターナショナル）の大会は、どれもが民族自決と祖国自立を宣言している。このように、国際主義とは、国民・民族どうしの衝突と戦争を回避するために諸国民間に法的秩序を築こうという制度にすぎない。それは、言語、習俗、伝統、その他の要素によって構成されている国民・民族どうしの差異を取り除こうというものではない。

国際主義者には、その一部⁽³⁾に、エスペラントもしくは類似の人工補助言語を採用する可能性と願望を表明するものもいる。しかし彼らは、民族言語や民族文化などの民族にとって神聖な事物が消滅したり、少なくとも古代ギリシア語やラテン語のような過去の遺物になってしまったりすることには同意しない。人工言語が全世界文化を担う唯一の媒体となることなど、ありえないユートピアであり望ましくもない、と考えている。

ところが、カルル・カウツキーは、この問題に関して違った視点に立っている。その著作『民族の解放』（1917）において、彼は、ジョレスと同じように民族を神

聖で保持すべきものだと考えるオットー・バウアーの見方に反論する。彼は次のように言う：

「個々の国家は、自治権を有する単なる行政区域になる。そうなると、一方でまた、それぞれの区域の範囲がひとつの言語地域だけになるように、相互に領域を限定することも容易になるだろう。状況的に可能なかぎりの民族国家が全面的に実現される可能性は、社会主義社会にならなければ生まれない。しかし、それが可能になるときは、同時に、個々の主権国家が存在しなくなる時である。民族主権ではなく、民族自治こそがこの発展の目標となるであろう」

「しかし結局は、民族単位の行政区域の相互領域限定はその意義を失うことになるだろう。人々の教養が十分に高まれば、誰もが世界のどこでも意思疎通できて安心できるように、自らの母語以外に世界語を習得するようになるだろうからである」

「民族性の差異化ではなく同化が、民族文化の高揚に向かうのではなく、世界文化と常に同義であるヨーロッパ文化の高揚に向かうことが、社会主義的発展の目標である」

カウツキーのテーゼは、民族文化の同化は不可避であり、それを暴力で阻止すべきでない、ということ述べている。このことから、この有名な社会民主主義者が無国民主義者であったと結論づけてよいだろうか。否である。カウツキーは、他のすべての社会主義者・共産主義者や、アナキスト⁽⁴⁾ さえもが考えるのと同じように、〈国民・民族〉の枠組みの中で機能する社会主義社会を提示しているからである。彼は、母語の他に補助言語としての世界語に言及している。では、その補助言語はどの言語か。彼は言わない。おそらく、ドイツ語でなければ、英語かフランス語のことを考えているのだろう。この問題に関する無国民主義者の見解がまったく異なったものであることは、後で述べる。

確かに、戦争が起こったときプロレタリアは自国を防衛すべきだということに、すべてに国際主義者が同意しているわけではない。たとえば、ボルシェビキは、資本主義の帝国主義段階においては、プロレタリアは祖国防衛戦争への参加に同意すべきでないとする。彼らの説明によると、それは国の防衛ではなく、世界市場や植民地再分割のための帝国主義どうしの収奪戦争だからである。

「帝国主義戦争を内戦へ」というレーニンのアジテーションはよく知られている。だからといって、この第三インターナショナルの天才的指導者が、国民・民族の諸権利が危機にさらされたときにその防衛戦争を戦うことを放棄する、という考えに賛成している、ということにはならない。先に引用（注2）した文章の中でそれは明らかである。

また、最近（1928）の『共産主義インターナショナル綱領』には、「その人種的所属に関係なく、あらゆる民族の権利と民族自決、その国家的分離を含めて、承認すること」という言葉がある。

このような見解は、第二インターナショナルにおいても承認されていたが、これは国際主義の見解である。ただ、今日のような条件下では、唯一取りうる見解ではある。

周知のように、レーニンとローザ・ルクセンブルクは民族問題で対立した。しかし、ローザ・ルクセンブルクが無国民化に賛成していたと考えるのは早計であろう。彼女は、1915年に出た冊子『ユニウス』の中で、ドイツ社会民主党を非難して、戦争中もプロレタリアは階級闘争をやめてはいけないという主張を支持する。なぜなら、

「この何世紀かで明らかのように、人民のあいだに自尊心と奉仕心とモラルの力を引き起こすのは、包囲する国ではなく、不断の階級闘争である。そしてそれこそが、外敵に対する最良の防御であり、最善の防衛策である」

こうして、ローザ・ルクセンブルクは次のように結論づける：

「……ドイツ社会民主党は、一貫した態度を貫けば、灯台の役割を果たすことができるだろう…… ドイツのプロレタリアートは、社会主義と人類の解放のための灯台守としてとどまるだろう。そして、それは疑いなく、マルクス、エンゲルス、ラサールの弟子たちにとって無価値ではない＜愛国的行為＞⁽⁵⁾であろう」

無国民主義者ならこういう言い方はしない。

もうひとり、今日最も権威あるマルクス主義者のひとりであるオットー・バウアーを引用しよう。バウアーは、『民族性と社会民主主義の問題』において、社会主義があたかもナショナリズムの最高潮となると述べている：

「社会主義社会こそが民族文化を全人民の所有となし、それによって全人民をひとつの民族に作り上げる。よって、あらゆる進歩的民族政策は、必然的に社会主義政策となる (p.164) …… 社会主義が民族に自治を与え、その運命を自らの意志の産物となす事実は、結果として、社会主義社会において民族間差異の増加をもたらす。民族間の違いがさらに激化し、民族性格の分断がさらに強化される (p.105) …… 全人民を民族の文化共同体へ導くこと、民族による完全な自己決定権の獲得、増大する民族間差異、それこそが社会主義を意味する (p.108)」

国際主義と無国民主義とが同義ではないことは、幾重にも証明可能だが、その必要はないだろう。ただ一点付け加えたい。誰もが同意することとして、さまざまな国際組織（インターナショナル）の元指導者や現指導者はみな十分に聡明な人であるから、どの文化言語にも「コスモポリタン」という言葉がすでに存在し、それが、「無国民主義」という言葉に私たちが与える意味に近い意味を語源的にもっていることを知っているはずである。もしその人たちが、それぞれのインターナショナルの綱領に世界の無国民化を含めようという気があるなら、必ずや国際主義についてではなくコスモポリタニズムについて語るはずである。だが彼らはそうはしない。このことから、彼らにとって、国民・民族というものが保護され保持されるべきものだと思われていることが明らかであろう。

彼らが正しいとしても、それは別の問題である。ここまで私たちは、SAT運動に芽生えた無国民主義を国際主義と同義だと信じさせようとする一部のエスペランティストの根拠なき主張に反駁することに努めてきた。その人たちは政治的文盲か意識的な錯誤者である。聖なる金曜日のある日に罪なく食べられるようにと、ウサギに「ヤギ」という洗礼名を付けた修道僧の話を出す。しかし、私たちは、党派的正統性を付加するために無国民主義を国際主義と同一視させようという考えには賛成できない。語源的にも歴史的にも、両者を同一視することはできないのである。

だが、労働運動の最も権威ある人たちが、民族文化を称讃し、その永遠性を説いているという事実は事実である。

それは驚くべき事実だろうか。そうではない。そもそも政党というものは自国の支配権力の獲得を目指すものである。だから、どれもが、そのアジテーション

活動において、目前にある人的手段を活用しなければならない。その人的手段を作り上げたのは民族語と民族文学と民族芸術などを通じてなされた数世紀にわたる教育であるから、政治扇動家たち⁽⁶⁾が、民衆の先入観と正面から向かい合っただけで、国民性・民族性を無視した手段による階級闘争を推奨しようとはしないのは、当然である。彼らは、たいてい、物事の発展の後からついて行くか、よくて発展とともに歩むかのどちらかである。彼らの仕事は、諸条件を調整したり、現状に適合させたり、さまざまな社会勢力のあいだに均衡を見いだしたりすることであって、先駆的な仕事は何もしないからである。

私たちの上述の主張は、ソ連の民族政策からも、正しいことが証明される。ここでは、支配者たちは民族性を取り除こうとしていないばかりか、小さな民族が独自の民族文化を獲得するべく、それらを援助している。それは純粋に国際主義的政策である。無国民主義者なら、学校でのエスペラント教育を義務化し、そうして民族性のない世界文化を促進するだろう。さらには、広大なソ連を構成する諸民族どうしの関係には共通言語が必要であるから、ロシア語がますます公用語の地位を占めつつある。私たちは、もちろん、その言語帝国主義を批判しない。反対に、私たちは、単一言語が広大な領域を統括するのを見るほうが、ウクライナや白ロシアやその他に愛国心感情が芽生えるのを認めるよりも、むしろ好ましいと考える。その種の愛国心の典型は、エスペランティストのあいだにさえ認めることができる。そのことによって明らかなのは、民族文化や民族の分離自決に関して広まりつつある考え方が、よくても単なる日和見主義であり、場合によっては、反動的で危険な主観主義的勢力になりうる、ということである。多くの事実がその危険性の存在を証明するが、あるウクライナの同志の意見を引用するだけにとどめておく：

「ソ連では、ナショナリズムに好意的な公的民族政策の盾のかげで、ナショナリズムが助長されている。その助長されたナショナリズムに対して声を上げるような共産主義者はきわめて少数である。たとえば、少し前、有名な共産主義者ヴァガニヤンの『民族文化について』という本が出た。非常に面白い本だが、新聞雑誌で公的な批判にさらされた。著者はその中で、民族文化推進者の姿勢と振るまいを攻撃し、あらゆる民族文化はブルジョワジーにとってだけ有益であり、民族文化はプロレタリアートの文化たりえない、というテーゼを擁

護した。しかし、この著者でさえ論理一貫して無国民主義までは至らず、途中で立ち止まって、こう発言する。プロレタリアートは民族言語によって国際文化を創造しなければならない。

(オーソドックスな共産党首脳たち、スターリンらは、民族文化の再生と人工的な再構築・復興に好意的である。レーニンの未亡人であるクルプスカヤ夫人などは、少し前に民族文化について講演をし、その中でナショナリズムを擁護して無国民主義を攻撃した。彼女が無国民主義をエスペラントと関連付けていたことに注目すべきである)。

実際の民族政策の著しい例としては、ハルコフのラジオ局がウクライナ語でエスペラント概説とエスペラント講座の放送を企画したことがあった。それが放送局を管理する一部のウクライナのナショナリストの気に入らなかった。なぜなら、彼らが目指すのはウクライナ化であってエスペラント化ではないからである。彼らは好ましからざる講座を中止させる口実を探し、そのような口実を見つけた。講座の何回目かで講師が、グローバルな経済の基礎の上にグローバルな文化が形成され、しだいに民族言語は死滅する日が来るだろう、と言ったとき、口実はそれで十分だった。次回から講座はなくなった！……」
(1927-07-02)

政治的アジテーションが不要で無駄だとは言っていない。それでは不十分なのである。最も本質的で重要なのは先駆者である。先駆者は、発明し予期し、先入観と伝統の森の木を倒し、退屈な仕事の沼を干しあげて、後に民衆が続くべき道を切り開くのである。

2. 無国民主義

世界を実際に変化させているものは科学技術であり、それは人工物を生み出す理性の所産である。それは、新しい生産力によって、発明し建設し、人間の労働条件とその生活環境まで変化させる。それらの変化は、人間の精神に再び影響を与える。科学は、芸術のように民族的ではありえない。理性はどの緯度にあっても同じである。2+2はロンドンでも北京でも4である。ある機械を作るには、モスクワであろうとニューヨークであろうと、同じ計算をしなければならない。私たちはこうして、グローバルな文化が立脚しうる基礎をあたかも手探りしている

のである。

一方、自動車の同じ部品を作る金属労働者は、パリでも東京でも、同じ工程の作業をしなければならないから、彼らは同じ人工的環境に置かれることになる。この事実は、世界のあらゆる金属労働者の精神が同じ形をとるはずであることの、十分条件ではないが、必要条件である。

それを阻止しているのは、数世紀にわたる重い伝統と、異なった言語と異なった教育である。

それらの労働者たちは、たいてい、同じ主人に搾取されている。それは、世界中の金持ちからの借入が株式制度によって作り上げた<金融資本>である。どの金持ちでも大都市の商品取引場で、見たこともなく存在も知らなかったような人間の労働力を買うことができる。そして、ニューヨークの大銀行で倒産が起きれば、東京とベルリンの経済生活に影響が及ぶ。このことは誰も否定しない。

グローバルな交通機関や無線通信その他の伝達手段のことは、すでに言い尽くされている。世界はますます狭くなっていく。それなのに、民衆のイデオロギーはその大部分が、民族経済が存在し国民・民族の独立が存在しえた一世紀前〔19世紀前半〕のままである。そのような国民・民族の状態など、今日では神話にすぎない。今でも封建的社会体制を維持し、国外の世界を無視してひとり自立する権利を正当化できるような国民・民族は、地球上に現実にはほとんど存在しない。そのような権利は単なる感傷的思考の所産である。

無国民主義者は地球を、全地球人に属するひとつの単位、全体としてとらえる。ある地域にその住民に活用されない資源があるなら、他の地域の住民がそれを活用するのを、その住民が阻止する権利はないと考える。

「権利」について語るとき、読者がこの言葉に対して、必ずしも同じ理解をしているわけではないだろう。細かい定義は避けつつ、理解してもらうために、次のように述べておこう。資本家にはその資源を奪う権利はない、なぜなら、資本家は全地球人のための利益をそこから目指すのではなく、自己または自己の階級の利益のために搾取するだけだからである。しかし、もし世界の他のどこかに搾取のない社会と取り残された先住民がおり、彼らが自分たちの使用しない資源を手放すのに同意しないとしたら、彼らの振るまいは今日の資本家の振るまいと同じだ、と私たちは考える。地球が地球人全員のものだとするなら、そのある一部

分が、他者が足を踏み入れる権利のない自分たちだけの専有物だと主張することは、不当である。

周知のように、円や正方形と同じく、権利それ自体が実体として存在するのでない。権利とは、殴り合いよりも議論のほうに価値を見いだすような、理性でものを考える賢明な人々によって構成された社会を支配するある種の理想的法則である。人類は、ずっと以前から、ほぼ厳密で理想的な円や正方形を描くことが可能になっている。人間どうしの関係を権利に支配させることも可能になるだろう。そうしたら、搾取のない社会が生まれ、そして社会主義が実現する。

現状は、多くの人、とくにプロレタリアは、ほとんど権利意識をもっていない。だから、あまりにもたやすく搾取されるにまかせ、反抗しない。「権利のための闘い」に訴えるのが、人々を鼓舞するよい方法である。

これまで資本主義は、残酷な帝国主義政策によって、植民地の資源を収奪してきた。資本主義は、ただ一部の階級の利潤の追求を目的とし、社会のすべての一員の福利を目的とするものではない。資本主義は、かつて封建主義に勝利した直後に自国民に対して振る舞ったのと同じ振るまいを、今日、植民地の非資本主義的支配の下の人々に対してしている。すなわち、抵抗に遭うことなしに人々を搾取している。植民地のプロレタリアートは、長く資本主義管理下にある国のプロレタリアートのようには階級的に組織されていないから、植民地における搾取はより激しく残酷である。

植民地における搾取は、資本主義時代の今日においては、不可避的である。もちろん私たちは、植民地において資本主義的帝国主義がとっている卑劣な手口を容認せず、これに反対して闘う⁽⁷⁾。なぜなら、それは遅れた社会状態の人民の開化を目的とするどころか、実際は、ブルジョワ階級の利益のために、人々を搾取し資源を収奪しているにすぎないからである。しかしだからといって、全世界の天然資源を地球人全体の利益のために活用する必要性が、主権を有する国民・民族の解消を要求し、やがて種族的特異性を捨て、すべての人が理性の方向に従うようになるであろう、という事実を否定するものではない。したがって私たちは、民族の独立や諸国民の自立や諸民族の風習・文化・言語の保護を説く政治政策を、反動的だと見なす。

だが、無国民主義者は、民族独立を目指して誠実かつ献身的に闘っている人た

ちに反対はしない。ただ、無国民主義者は、自らはそのような闘いに加わらない。なぜなら、民族独立がプロレタリアートを実際には解放しないこと、そして、それがブルジョワ階級だけを利することをよく知っているからである。さらにいうなら、生産力の今日の段階では、国民・民族の全面的自立は不可能であり、その追求は夢物語でしかないからである。

無国民主義者は、民族闘争志向のプロレタリアに対して、彼らが労力を間違った方向に無駄に費やしており、階級闘争こそが彼らを解放しうるのであり、そして、あらゆる国民・民族の主権や国家主権の放棄と、人間の間人間に対するあらゆる搾取の撤廃のみが、世界の恒久的平和状態のための条件を生み出しうるのだ、ということを理解させようと努力する。

民族解放のアジテーションを前にした無国民主義者の態度は、おかしな空想的な方法で病人の看護をしている田舎の無教養者を前にしたときの医者態度と似ている。その医者がいい人なら、そんな看護を受けている患者に同情はするが、その看護を手伝うことはできないだろう。そして、適切な治療を助言して、もし看護人がそれを受け入れないなら、医者は憤慨するだろう。

アナキストや共産主義者や社会主義者が行っている民族独立のアジテーションは、望ましい世界の統一に反対し、労力と時間と血を無駄に費やさせるだけであり、それは本質において反動的なのである。

ときには、そのような政策が、他の帝国主義国家に対して一部の帝国主義国家を利するだけだということもある。ひとつ例をあげれば、アメリカに対するニカラグアのサンディノ将軍の闘いである。世界のどの「革命的」刊行物にも、アメリカ帝国主義に対するニカラグアの偉大な愛国者の「英雄的」闘いを支持せよ、という熱狂的な呼びかけを目にすることができる。しかし、サンディノには、そこに社会主義政権を築こうという意図はまったくない。たとえその意図があったとしても、その小さな国だけでそれを成功させるチャンスはない。世界の6分の1を代表するというソ連にしてさえ、そこに社会主義を建設することの可能性について疑いを抱く複数の著名な革命家がいる。たとえば、トロツキーは、一国だけで社会主義を建設することは不可能であるという見解を主張した⁽⁸⁾。サンディノの反アメリカ帝国主義闘争は、またイギリスとヨーロッパの帝国主義に有利に働いているのである⁽⁹⁾。

フランス帝国主義に対するモロッコのアブドゥル・クリムの闘いを考えても、同様に述べるができる。くりかえし強調しておくが、世界のどこにおいても、民族解放闘争は<本質において>反動的である。「本質において」と強調するのは、<戦略的>観点からすると、ある国の首都に運動が燃え革命が起きたとき、植民地解放闘争は、その国の権力を弱体化させるという意味において、<一時的に>有用であるからである。たとえば、もしアメリカに革命諸条件が存在し、ブルジョワジーとプロレタリアートとのあいだの闘争が激化したら、ニカラグアのサンディノの活動は、アメリカ政府に軍隊の派遣を強いることによって、明らかにアメリカ自体の革命に役立つ。しかし、「革命的」刊行物が愛国者サンディノについてアジテーションしたとき、そのような条件はまったく存在しなかった。

だから、そのアジテーションは、本質においてでなく事実として反動的であると私たちは考える。もしアメリカ帝国主義が太平洋と大西洋を結びつけるためにニカラグアに運河を造るなら、それは歴史発展における一歩前進であると見なす。

客観的に見て反動的な政策のもうひとつの例は、中国におけるコミンテルンの政策である。コミンテルンは、ヨーロッパの帝国主義に対する国民党の闘いを支持するように、中国の共産党員に助言した。その結果どうなったか。中国民族運動の指導者たちは共産主義者の協力を快く受け入れて、そして、自分たちが十分に強くなってその協力を必要としないと思ったとき、彼らは共産主義者を殺し始めた。何千名もの同志が<民族>闘争に倒れ、それはそれだけ階級闘争を弱体化させたのである。

中国やインドの民族闘争の本当の意味は、当地のブルジョワジーが、余剰価値を分け合わなければならない外国のブルジョワジーの助けを借りずに、自分たち自身で労働者を搾取したいということである。

中国やインドのプロレタリアの関心は、階級闘争にあり、そのために団結し、帝国主義国のプロレタリアと連携して活動することにある。帝国主義国のプロレタリアの関心は、植民地の兄弟たちの闘いをできるかぎり支持することにある。なぜなら、植民地の労働者が低賃金で働くことに同意するなら、それはそのまま帝国主義国の労働者の賃金にはね返ってくるからである。これは誰も否定できない事実である。民族闘争は本質において反動的であるが、階級闘争は間違いなく革命的である。搾取される側が要求すればするほど、搾取する側は、新しい機械

を導入するなど、生産活動の展開を改善しなければならなくなる。そのことが、結果として、労働者が失業を防ぐために労働時間の短縮を要求することになる条件を作り出す。

階級闘争は、搾取される人たちにグローバルな連帯の必要性を認識させるが、民族闘争は、民衆の中に愛国心をあおり、さまざまな国のプロレタリアがひとつにまとまることに対する強固な主観上の障害となる。

自立した民族経済が存在しえたと昔なら、民族闘争が何らかの肯定的な意義をもつことがありえたかもしれない。しかし、その時代はもう終わった。労働者階級の解放に関する今日の問題は、広大なものではあるが、ごく単純である。すなわち、ブルジョワ階級に打ち勝って、世界を管理運営することである。そのための客観的条件はすでに存在する。そのじゃまをし障害となっているのは、主観上の力、伝統やさまざまな文化や言語である。世界の一体化、国民・民族なきひとつの人類を目指して、目的意識をもって努力しようとする人は、あらゆる国民的・民族的な迷信・固定観念に対し、それが言語的なものであろうと他のものであろうと、それに反対して、妥協なき不断の闘いを推し進めなければならない。そして、その方向に後押しするすべてのことを支持し、それに関心をもつであろう。

その仕事に、無国民主義者は強い自覚を持って自らを捧げる。彼らは、ある国の支配権力を奪取することが主目的であるような諸政党の日和見主義的な活動に協力することを拒否する。そういう目的を達成するためなら、政治的扇動者は民衆の偏見さえ利用する。彼らはたいてい、国民・民族なき社会をもたらすために消滅させる必要があるものの根幹に触れることのない欺瞞的な手段を用いて、民衆を扇動する。

その最たる例が、最近の議会選挙の際のドイツ共産党である。その公約の中にはナショナリズムが大きな位置を占めていた。ある意味で、それは国家社会主義者（ファシストあるいはヒットラー主義者）のそれとさえ似ていた。後者は大勝したが、共産党もかなりの勢力を社会民主主義勢力から奪うことに成功したのは、彼らの公約が民衆のナショナリズム風潮をうまく利用したことが主な勝因である。その結果どうなったか。今日、ドイツでは、あらゆるものがナショナリズムの大波にのみ込まれる脅威にさらされている。

今日のアルザス・ロレーヌ地方でも、それに劣らず注視すべき事実を見ることができる。そこでは共産主義者が、聖職者らの最も反動的な宗教勢力と統一戦線を張っている。

民族解放のアジテーションは、まったく予期せぬ結果さえ生み出した。ずっと昔に同化した地域の分離願望を引き起こしたのである。民族が必ずしもひとつの統一単位ではないことを思い出さなければならない。その統一単位は、歴史が捏造した人工物である。そして、民族解放のアジテーションが歴史の車輪の方向を変える志向性をもつ事実が、その政策が反動的であることをよく示している。

民族闘争を後押しする政党の策略は、また別な予期せぬ事態ももたらした。満州でソ連と中国が衝突したとき、民族自決権に関する政策の徒たちは、スターリンに対しその「帝国主義政策」を非難したのである。彼らの非難は形式的には正しかった。スターリンは、自分自身の政策に一貫した行動をとらなかったからである。しかし、彼の行動は「革命」の利益のためには正しい行動だったと私たちは考える。

先に述べたような動機から、今の政党は教育的仕事を十分に果たすことができていない。歴史過程を押しとどめている主観上の力を破壊する仕事を効果的に行うことができていない。生産力の果てしない発展と拡大によって、人類を必ずや世界一体化へと導くであろう歴史過程⁽¹⁰⁾である。

したがって、無国民主義者は、民族解放のためのいかなる扇動や闘いにも参加する意志がないということをはっきりと公言する。彼らはプロレタリアに、それがけっして彼らを解放するものではないことを忠告するのである。

民族闘争が幻想であり、労働者に対するまやかしであることは、最近の歴史が明白に教えてくれる。解放された民族であるチェコスロバキア、エストニア、フィンランド、アイルランド、ポーランドなどのプロレタリアの生活条件を見れば、解放以前と比べてまったく改善されていないことがわかる。

プロレタリアートにとって成果をもたらさうる唯一の闘争は、民族闘争ではなく、階級闘争である。労働者が、より短い労働時間、よりよい労働条件を達成したときこそ、彼らは決定的な解放への道を実際に一步前進したといえるのである。

しかしながら、日々の経験からわかることは、階級闘争が成功するチャンスはそれが世界規模で組織されたときにしかない、ということである。今までのプロ

レタリアートの国際組織化は、もはや階級闘争の成功へと導く最適な形態だとは
いえない。無国民主義こそが合理的で最適の組織形態を提示することができる。
それによれば、労働者は国民・民族単位や国際組織に組織されるのではなく、産
業別に全世界レベルで組織されるのである。たとえば、世界中の鉱山労働者が同
じ組合に所属し、その組織がストライキを決定したら、その決定は全世界組合員
に及ぶ。そして、資本主義が克服されたときには、その組合が、全人類の必要と
要求に応じて鉱業を管理運営するのである。

同じことは、あらゆる産業についていえる。統計機関は、世界中の全資源の統
計をとり、すべての人が受け取る権利分の割り当てを計算する。すべての生産活
動は最適化され、すべての人が快適な生活を営むのに、毎日数時間（三四時間ほ
ども）働けば十分になるであろう。そのような世界管理運営に、国際主義者たち
が保持しようとしている国民・民族の枠は意味を持たないだろう。

疑いなく、このことはすべて、今はユートピアにしか見えないであろう。そし
て、今日の革命家——日和見主義者たちの唇に憐憫の微笑を浮かべさせるだけだ
ろう。私たちはもちろん、無国民主義が階級闘争を目指すプロレタリアートに明
日にも受け入れられるだろうとは思っていない。しかし、マルクスとエンゲルス
も、83年前に『共産党宣言』を発表したとき、ユートピア主義者にしか見えな
かった。それから長い時間を経たが、彼らが必ず建設されると提示した社会は、ま
だ存在しない。ソ連で「社会主義を建設中」であるということはつまり、まだ完
成していないということである。本当に社会主義が建設されているのか、あるい
は巨大な官僚寡頭政治のもとでその経済が国家資本主義に変貌しつつあるのかは、
検証しない。ソ連には、資本主義国と同じ貨幣制度と給与体系が存在している。
煉瓦職人は、たとえば、建築家と同じ給与はもらえない。この事実確認は非難で
はない。愚かなことをするといわれずに、予見しうることを示したいだけである。
一世紀にわたる社会主義宣伝を経て、それがまだどこにも存在しないのであるか
ら。

無国民主義者の見解は、今のさまざまな労働者インターナショナル（国際組織）
の政策とは、まったく一致しない。私たちの考えでは、それらの政策は、ある意
味で反動的である。少なくとも、俗物的日和見主義である。

マルクスとエンゲルスが有名な『宣言』を書いた当時、世界語は存在しなかつ

た。しかし、今はエスペラントがある。すでに数万人の労働者がエスペラントを知り、数千人が日々これを実用している。すでに10回以上に及ぶ世界大会⁽¹¹⁾で、数百名のプロレタリアがこの作られた言語を用いて、彼ら自身の事柄について熱心に議論をたたかわせている。このような目に見える<事実>にもかかわらず、労働運動の指導者たちはこの理にかなった全世界相互理解の手段を無視している。彼らの振るまいは矛盾していない。彼らは、意識的であろうとなかろうと、労働運動へのエスペラントの全面的適用が、彼らの政策と彼らの指導方針の変更を余儀なくさせるであろうと感じているのである。もしプロレタリアがみな互いに理解し合い、大会を通訳や翻訳なしで行うことが可能になったら、もし世界中の労働者たちが直接連絡を取りあうことが可能になったら、民衆に対する彼らの指導者としての役割が縮小してしまう、と彼らは漠然と感じているのである。実際、社会に労働者指導階級という新しい階級が発生している。ある意味で世界語は彼らの利益に反する一面をもつ。

無国民主義者は、そのような指導者たちを恐れることなく堂々と非難する。そして、民衆に向かって、その賢明なる人々の理性に呼びかける。理にかなったものすべてを、技術の進歩にかない、プロレタリアートの発展をじゃまする障害を破壊するのに役立つものすべてを、活用し普及させよ、と呼びかける。無国民主義者は、国民・民族の言語と文化、習慣と伝統など、国民的・民族的なものすべてと闘う。彼らにとって、主要言語はエスペラントであり、国語・民族語は補助言語だと見なす。いかなる民族闘争に参加することを拒否し、階級と国民性・民族性とあらゆる搾取を取り除くことを目的とした階級闘争だけを、搾取される人たちにとって必要かつ成果のある闘争であると認める。諸国民・諸民族の相違を消滅させることに役立ち、地球の合理的な管理運営につながるものすべてを支持する。諸国民・諸民族を混ぜ合わせ溶かし込むものは、すべて人間的なよいものだと見なす。

無国民主義者の信念は、発明し建設する理性こそが全世界文化が成り立つ唯一の適した基礎であるという確信に基づく。しかしもちろん、すべての人が理性によって支配される人間にすぐになるとは思っていない。感情が大きな力であり、神話が歴史において大きな役割を果たしてきたことを知っている。人々が無国民主義を、世界の一体化を、祖国と同じようなひとつの神話として提示することが

できるなら、それによって損なわれることはそれほどない。だから、自覚ある無
国民主義者は、大いなる高貴な理想への情熱にとらわれた人を遠ざけることはし
ない。理性が神秘主義に貢献することはよくあることである。かわりに、神秘主
義を理性に貢献させよう。

しかし、誤解がないようにしなければならない。搾取される人たち、プロレタ
リアートだけが、国民性・民族性をもたない搾取なき社会を建設する歴史的勢力
であることを、私たちは深く確信している。プロレタリアが本質的にブルジョワ
と異なっているからではなくて、その解放のための階級闘争が彼らをして世界レ
ベルでの一体化へ向かわせ、また搾取する人たちをして生産手段のさらなる合理
化・完全化へ向かわせるからである。賃金が低く劣悪な生活条件に暮らすことに
労働者が同意しているところでは、主人たちは設備投資と生産の合理化を実施す
る十分な動機に欠けるからである。

世界管理運営は、世界文化、理性を下層^(1 2)とする文化の基礎を整え提供する。

それは、人々がみな同じ相貌になることは意味しない。人々の精神性と性格に
は、何らかの一体性が生まれるであろう。国民・民族によって異なる特性はなく
なるが、個人によって異なる特性がなくなることはない。そして、人々が世界の
あらゆる部分と交流できるようになり、日々の自由時間が増え、その分を個人の
仕事、個人文化に捧げることができるようになるから、その結果、独特な思考と
感性をもった強固な個人が生まれ、世界中で理解され感受されうるさまざまな芸
術にそれらが表現されるようになるだろう。正にそう推測することができる。

原注：

(1) 原綴り：Jaurès。

(2) 「もし戦争が民主主義を防衛し国民・民族を抑圧するくびきに対する戦いで
あるなら、そのような戦争に私はけっして反対しない。「民族防衛」がその種の戦
争あるいは反乱であるなら、私はその言葉を恐れない…… 今、被抑圧民族とそ
の抑圧者との間に勃発しかねない戦争、たとえばイギリスに対するアイルランド
人の反乱、フランスに対するモロッコ人の反乱、ロシアに対するウクライナ人の
反乱などの戦争が正当なものであることを認めようとしなければ、それは同様に
おかしいことである」、レーニン、『ボリス・スワーリンへの公開状』、1916：『社
会批評 (La Critique Sociale)』第1号 (1931年3月) 所収。

(3) レーニンがエスペラントの反対者であった。そのため、オーソドックスなレーニン主義者でエスペラントを学んだことのあるものは、それを忘れねばならなかった。

ロシア語の『労農通信員 (Raboče-Krest'janskij Korrespondent)』第21号 (1928年11月15日) で、レーニンの妹である M. J. ウリャーノワが次のように言っている：「レーニンは何度かエスペラントについて、あまりに人工的で単純で死んだ言葉だとして、非常に冷淡に語った……」

『センナツィウーロ (Sennaciulo)』第278号 (1930年1月30日) に、ストックホルム市長カルル・リントハーゲンの報告が載っている。彼は以前レーニンと会談した際に、エスペラントについて関心を引こうと試みたが、このコミンテルンの元指導者は、「私たちはもう3つも国際語をもっているし、ロシア語がその4番目になるだろう」と述べ、人工の言語は不可能だ、と論じたという。

(4) 『センナツィウーロ (Sennaciulo)』第297号掲載の論説「アナキズムと無国民主義」を参照。当然、アナキストは祖国に反対して闘う。しかし、彼らは祖国を国家と同一視している点に注意する必要がある。国家を破壊しようとするのは、彼らが言語や文化などの国民・民族の差異をも破壊しようとすることを意味するものではない。上述の論説で、セバスチャン・フォールは、アナキズム社会の機能を述べるに当たって、国民・民族の枠を保持したままである。エスペラントが解決した言語問題への考察を欠くかぎり、それ [国民・民族の枠の保持] は逃れられない。

(5) 強調は著者。

(6) 「扇動家 (アジテーター)」という言葉を使うことによって、一般党员と、それ以外の、議員その他の役職に任ぜられることを目指す職業的政治活動家とを区別したい。

(7) どういう手段で闘うのかと尋ねられたら、私たちは、「反帝国主義者」と同じ方法、すなわち言論によって、と答える。世界中の革命的刊行物がニカラグアの愛国者サンディノの反アメリカ帝国主義の闘争を讃えても、その編集者たちは、武器を手にとってその軍隊に参加しようとはしていない。

植民地で先住民の反乱が起こり搾取者たちに対して戦っているとき、私たちはもちろんそれに賛成する。しかし私たちは、先住民の真の解放は「民族独立」で

は達成されないことを忠告し、あらゆる搾取を撤廃するために全世界のプロレタリアートと力を合わせるように、彼らに助言する。どこかの大都市で労働者たちが植民地搾取に反対してストライキをするなら、私たちはもちろんそのようなストライキに参加する。

(8) この部分が執筆されたとき、トロツキーがまだ生きていたことに注意。[編者]

(9) 誤解を避けるために述べておくと、ソ連に関しては問題がまったく異質である。もし資本主義国家がソ連を攻撃したら、その労働者は、祖国ではなく革命を、社会主義を防衛することになる。また、その防衛に参加することは全世界の労働者の義務でもある(*)。

しかし、私たちの思想を沈黙させないために、次のように言っておこう。もし他の国で資本主義の崩壊がないまま10年が過ぎたら、もしソ連の社会主義経済と他の国の資本主義経済の共存に成功したとしたら それは非常に疑わしいが ほぼ間違いなく、ソ連に何らかの危険な愛国思想が生まれるであろう。

(*) ランティは、この個所を執筆して間もなく、レーニンの革命同志たちに対するまやかしの裁判のあとの肉体的抹殺という形によってスターリンが与えてくれた教訓の下で、ソ連国家の防衛に関する考えを改めた。

(10) ここで、その過程を何らかの神聖なものだとは考えていないことを述べておく必要がある。

(11) 1951年にその大会はすでに第24回に達した。[編者]

(12) 存在を構成する本質的な部分のこと。

SENNACIISMO

無国民主義

Eŭgeno Lanti

(『レノヴィーゴ (Renovigo)』誌、第40・41・42・43号、1941~42年、メキシコ)

「無国民主義」、この言葉それ自体でその意味は明確である。国民が存在せず、地球上のすべての人々が同国人、世界市民となる、そういう主義である。

しかし、そんな主義は無意味だ、と読者は思うだろう。現に存在する国民・民族を無視することは不可能だからである。残念ながら、国民・民族は現実である。病気も現実であるが、ひょっとして一部の医者を除いて、だれもそのために喜び、それが永遠であることを望むものはいないだろう。

国民・民族は存在する。正にそのためにこそ人類は病気なのであって、莫大な量のエネルギーと物資を、破壊と殺戮のために浪費しているのである。しかし、病気の存在のおかげで快適な生活がおくれる医者と同じように、国家の首領や大使や将軍などの寄生者たちは、国民・民族の存在から利益を得ているのである。

もちろん、大きな報酬が得られるように、金持ちの病人が十分な数いてほしいという願望を公言する医者はいないだろう。だれもが、患者が早く快復することを望んでいる、と主張はする。

同様に、あらゆる支配者も支配渴望者も、地上に平和を建設するために努力しており、そのために軍備と同盟によって国民・民族間の均衡を図るべく苦心しているのだ、と主張している。外交官は、そこに快適な仕事を見だし、彼らが外国の同僚と作り上げた相互協定について世界中の新聞が報じるのを見て、快感を感じる。

そして、そのような相互協定が戦争を避けることに成功したことはないから、つねに乱暴な政治家が現れて、ゲームを変更するために次々と提案をする。その変更の目的は、人々に彼らこそがそのおぞましい国際チェスゲームの駒であることを気づかせないことにある。最近のそのようなペテンの代表が<国際連盟>の設立である。それは結果として、何千人もの寄生者に役職を与え、何十億枚もの金貨の出費をもたらしただけである。

国際連盟はあらゆる国際主義者の支持を得ている。この機関の組織構造に対して、彼らは批判的な改編提案をほとんど行わない。語源的また歴史的にいて、国際主義とは、ナショナリズムと、科学技術の発展につれてつねに成長する経済とのあいだに、法的妥協を見いだそうとする政治システムにすぎない（科学技術の発展は、人間の想像力の結果であり、人間の想像力は人間の意志に帰する）。よって、無国民主義者の考えでは、国際主義はその場しのぎの緩和剤にすぎず、持続的な平和を保証するものではない。

しかし、いつの日か無国民主義が現実になるという希望を抱かせるものがある

のか、と読者は問うだろう。希望的考察は、次のとおりである。

国民・民族は歴史過程の一段階にすぎず、時間的距離をどんどん縮小しつつある科学技術の展開に則していえば、国民・民族は今日すでに時代錯誤の一部になってしまっているということである。しかも、その過程の進行は止まりそうにならない。専門家が少し前に語ったところでは、20～30年後には、飛行機はロケットエンジンを搭載するようになり、時速1500km以上で道路の表面をつんざいて飛ぶだろうという。自動車は専用道路を走り、少なくとも時速150kmにはなる。鉄道はもっぱら物資輸送に利用され、長距離旅客輸送は航空機で行われるようになるそうだ。世界交通はますます緊密化し、その状態はしだいに共通言語の必要性を実感させるようになる。そのときには、エスペラントが根付くためのさらに好意的な基盤が生まれるだろう。

人工言語が普及するにつれて、無国民主義の宣伝も同程度に容易になり、効果を上げるだろう……

今日、無国民主義は、歴史要因としては、まだ萌芽として存在するにすぎない。それは、戦争[第2次世界大戦勃発]の前には、エスペラント組織のSAT(Sennacieca Asocio Tutmonda)に好意的な場を見いだしていた。この組織は、世界エスペラント協会(Universala Esperanto-Asocio)⁽¹³⁾同様にその組織構造は国民性・民族性をもたないが、無国民主義者の組織ではない。両組織とも国民・民族を無視してはいるが、無国民主義を宣伝することはその仕事ではない。

現在においては、無国民主義運動が大きな出来事に実際的な影響を与える力はないから、その信奉者がもちうる目標はひとつしかない。それは、ナショナリズムの狂気の沙汰の犠牲にならないようにすることである。無国民主義者の考えでは、各国の愛国者たちが互いに殺し合うのは彼らにとってまったく当然なことである。だから、無国民主義は、それをやめさせることを目標としたりはしない。国民・民族は、多数の未熟な愛国者たちによって、支配者と支配渴望者のために存在している。無国民主義者が理性に従うなら、次のように言うであろう。

ナショナリストどうしが殺し合うなら、かつてにどんどん殺し合えばよい。しかし、国民・民族のおかげで利益を得ている少数者の栄光ためにだまされて死んでいく人々は、あわれである。

国民・民族の存在は、人類最悪の恐ろしい災いである。科学技術は世界を一体

化しようとしているが、そもそも人間の精神は、それと同じスピードでは発達しない。無国民主義の宣伝の目標は、この歴史過程の均衡を取り戻すことである。

無国民主義のテーゼを紹介すると、たいてい、無関心か驚きか感情的な反発が返ってくる。ナショナリストが、いらだちを抑えてあえて議論しようとするときは、抗議の意味をこめて、よく次のように強く主張する。

「祖国に対する愛国心はまったく自然な感情であって、無視することなどできるわけがない。だから、無国民主義は不自然であり、考慮に値しない奇怪なものだ……」

そのナショナリストが教養のある人なら、愛国心に美しい定義を与える多くの有名人の権威ある言葉も引用するだろう。そのような言葉を、私はこれまでに、さまざま言語から少なくとも50種以上は集めた。

一方、国際主義者なら、この機会をとらえて、必ずやフランスの有名な論客ジョレスか、またはレーニンの言葉を引用するにちがいない。ジョレスは、その著作『新しい軍隊』の中で、イギリスの哲学者ベーコンの言葉、「少しの科学は神への信仰を弱くするが、大量の科学はそれを強くする」を言い換えて、「少しの国際主義は愛国心を弱くするが、大量の国際主義はそれを強くする」と述べた。

レーニン全集第13巻342ページ第13節（フランス語版）では、「本当の民族戦争においては、祖国防衛という言葉は欺瞞ではなく、私たちはそれに反対しない」と述べている。

この問題の本質において、ナショナリストとインターナショナリスト（国際主義者）が同じ意見を述べ、ただ表現と運用面での違いを議論するだけであるということ認めるとき、無国民主義とは客観性を無視した空想的理論なのではないか、と思うかもしれない。しかし、私たちは恐れずに主張する。実際、私たち無国民主義者こそが、世界平和の問題をその本当の姿に則して考えているのである。私たちはまた、国民意識・民族意識が<教育を通じて人工的に>刷り込まれたものだということも主張し証明することができる。どの子供からでも、メキシコの愛国者、アメリカ、ニカラグア、チリ、イギリス、日本その他の愛国者を作り出すことができることは、どの子供でも、キリスト教にもイスラム教徒にも仏教徒にもなるのと同じことである。

人々が生まれ祖先が葬られている土地に対する「自然な」愛情は、非常にかぎ

られた狭い地域に結びつけられるものであり、けっして国全体に及ぶものではない……

私は今メキシコにいますので、私の主張の根拠として、この国に関係したことに言及しよう。数か月前、重要な雑誌『エルユニベルサル (El Universal)』に、アンヘル・M・コルソ教授の『先住民問題と民族体』という一連の論文が掲載された。その長文の研究には、意図せずして私の主張を裏付ける多くの事実が紹介されている。残念ながら、この『レノ (Reno)』誌のエスペラントページの長さの関係上、全文を引用することができないので、著者の非常に意義深い主張を二点紹介するだけにとどめたい。

第一に、メキシコ国民というものは、識字能力のない数百万人の先住民の意識にはいまだ存在しないこと。第二に、メキシコには80の民族体を数えることができること。この二点である。

この問題の解決として、モスクワに忠実な国際主義者たちは、「メキシコ先住民共和国連盟」の設立を提唱している。その結果として、諸方言（60種）は保持され、習俗は尊重されることになる。要するに80の民族体よ永遠なれ、ということである。

コルソはこのレーニン・スターリン的視点を正しく笑いとばしている。彼が論じるところでは、80の先住民に彼らの方言を通じて教育を受けさせることは不可能である。たとえば、古典文学をオトミ語に翻訳することはまったく不可能である、という。

興味深いことだが、これに関して、無国民主義者の意見はこのメキシコ国民主義者先生の意見と一致する。確かに、彼の視点は帝国主義的である。しかしそれは、反動的とまではいわないまでも保守的であるボルシェビキ国際主義者の視点よりも、はるかに歴史発展の法則に合致する。「言語の統一なくしてメキシコ国民性はありえない」、とコルソは正しく述べる。

同様に、無国民主義者は、世界語なくして世界国家は存在しえないし、順調に機能しえないと考える。13年前、『労働者エスペラント主義』の第5章で、私は次のように述べた。「……無国民主義を言語の異なる人たちに宣伝するのは、識字能力のない人たちに文芸を教えるのと同じくらい愚かである……」

しかしまた、私たちの宣伝冊子『無国民主義者宣言』が数年後にフランス語に

訳され、その後英語に、そして今年アルゼンチンでスペイン語訳が出たことも事実である。それは私自身が助言したのではないが、記者たちは、世界平和を夢見ながら言語問題に無関心でいる人たちを民族語訳によってエスペラントに誘うことが目的だ、と説明している。

エスペラントは存在し生きている。この人工の、国民性・民族性をもたない言語でもって、私自身が世界中の人たちと交流することができた。すでにもう6年間、私はこの比較的小さな惑星を、エスペランティストだけと接触しながら渡り歩いている。経験によって私は、すべての人種の人々と仲よくなることができることを知っている。中国と日本でも、私はエスペランティストの中にいるときはくつろぐことができた。そのことから私には、無国民主義が、実利根性の俗物たち、すなわち国民・民族の永遠化によって利益を得る人たちの言うような空理空論ではない、と結論することができる。国民・民族の永遠化に利益を得る人とは、国家の首領、大使、領事、将軍、支配渴望者たちその他のことである。この寄生者たちは、一般に、戦争中も自分たち自身は犠牲にならず、下層の人々の悲惨と死の上に、自分たちにはつねに快適な生活を保障するような人たちである。

地上に平和をうち立てたいと思いながら、国民・民族の君臨を保持したいと望むのは、患者を治療したいと思いながら、病気の原因に無頓着な医者のようなものである。国民・民族の君臨が存在するかぎり、私たちの惑星の資源が<すべての人々>の手にあるのでないかぎり、戦争は必ず起こるのであろう。

今の科学技術の発展を考えるに、専門家でなくても、生産力を破壊目的で利用することをやめれば、すべての人が良好な生活と快適さを享受できることがすぐわかるだろう。

最近の新聞によれば、イギリスは毎年1千百万ポンドを軍事目的で支出しているという。ドイツは何マルク支出しているか。アメリカは何ドルか。日本は何円か。地球全体でどれほどのエネルギーと物資が間違った使い方をされているのか。私にはそれに答えることができない。しかし、もし人類がこれほどまでに国民・民族という病気にかかっていかなかったら、人類はもっと良好な生活と平和を得るだろうということは、考える能力のある人なら、だれにでもすぐにわかるだろう。

ナショナリズムまたは愛国心（私はいつもこのふたつの用語を同じ意味で用いる）は、私たちの時代の最も強力で最も影響力のある「観念の力」である。それ

は、一世紀前にはこれほど強くは存在せず、教育（むしろ「調教」と呼ぶほうがふさわしい）による刷り込みの結果である。愛国者たちは、中世ヨーロッパの宗教家に似た狂信者である。宗教信徒が異教徒をいつでも躊躇なく殺せるように、愛国者たちは、同じ宗教信徒である他国の愛国者を躊躇なく殺す。

ナショナリズムは非常に強力なイデオロギーであって、少数の国民利益の享受者たちは、どの国民・民族にあっても容易に人々を操作して、国民主権が危機にさらされたときには最大の犠牲さえ捧げるように作り上げている。ある国で、失業と悲惨が支配しても、その国の政府はたいてい、国家予算が絶対的に不足し破産しそうだから手が打てない、などと言うばかりである。ところが、支配階級の利益が危機にさらされたら、そのための予算は天文学的数字にまでふくれあがる。とるにたらない小国の大統領も大統領であり続けようとし、最小国の国王も君臨し続けようとし、最貧国の大使も、大使として他の国にいて、王子のような生活をし続けようとする。

幸運なことに、ナショナリズムはそれ自体のうちに自己破壊の芽を有する。それは帝国主義である。ある国民・民族が自分たちがまわりの国民・民族より優れていると感じるとき、それは、まわりの国民・民族の一部または全体を併合しようとする。ゆえに、「被抑圧民族」がつねに存在する。小民族は、大民族と大民族の間の緩衝地帯として役割を果たすしか、生きる道がない。たとえば、イギリス、フランス、ドイツに対するベルギー、ルクセンブルク、オランダがそれである。

どの国家首領たちも、権力欲に満ちて、つねに国家を拡張したいと望んでいる。どの国家大統領も、できるだけ多数の国民と黨員の上に君臨したいと渴望している。祖国 *patrio* と政党 *partio* のあいだには多くの類似点がある。どちらも本質的には同じ装置である。だから、異なった国民・民族の愛国者どうしが殺し合うのと同じように、同じ国の異なった政党の黨員が殺し合うことも珍しくない。

このことを私たちはよく承知している。だから私たちの機関誌『異端者 (Herezulo)』⁽¹⁴⁾ の中で、その指導要綱として第6項に、無国民主義者は「あらゆる統率者的存在と闘う。これは、あらゆる指導を拒否するという意味ではない」と記してある。

人間の支配欲にたがをはめないかぎり、人類に平和は享受できないだろう。国民性・民族性をもたない世界国家では、組織問題はもはや政治的問題ではなく技

術的問題となるだろう。技術者は、同種の専門家たちによるチェックを受けた競技会で選ばれるだろう。そのときに解決しなければならない問題は、例外なくすべての人の利益になるように、私たちの惑星の資源を、いかに合理的に活用するか、ということである。

自分の国民・民族の支配権力を手にすることが最大の目的である政治家がよくするような詭弁に満ちた言い方をすれば、無国民主義は最善の種の愛国主義であり、全世界の圧倒的多数の愛国者の良好な生活は、国民・民族の君臨が消滅したときにこそ可能になる、と言ってもよい。

そのときまで、無国民主義者にとって、この世は巨大な狂人世界だという感覚が続く。だからといって無国民主義者までが、ナショナリスト狂人どものように愛国心の鳴き声をあげる必要はない。

メキシコ、1941年10月5日、E・ランティ

原注：

(13) ここでいう UEA は、現在の UEA ではなく、1907年にホドラーが設立した初期 UEA のことである。初期 UEA は、SAT と同じような、国民性のない組織構造をもっていた。

(14) 『異端者 (Herezulo)』誌は、1933～1936年に、無国民主義の宣伝媒体として発行された。